

山岳部再建の経緯

高橋 淳

私にとって学生時代の想い出は楽しかった事や、悲しかった事苦しかった事全てが山行につながっている。中学生の時に山に入ってより高校、大学と変わる事なく山岳部に属して山に親しんだ私にとってはその青春は山に明け山に暮れたといつても過言でない。私はこの一本槍な青春を誇りに思いこそそれ少しも後悔などしていない。私を山に向かわせた先輩その他周囲の人々及び環境に非常な感謝の念を持っている。

入学後二三ヶ月して私の属するドイツ語の一年先輩である村上氏（現姓十川氏）より話があつて“当時のドイツ語講師木村先生が私に関する内申書か何かから私が大町南高校で山岳部リーダーに任せられておった事を知り、これを村上氏に告げ、外大でも山岳活動を始めたらどうかと薦めた”という。村上氏が何故に山をやろうとする動機をもっていたか記憶していないが、山には殆んど素人のようなであったのに対し、木村先生は若い時からのベテランで今でも鹿島部落の加納さん宅の例の記帳にそのお名前が見える筈である。さてその時村上氏の紹介してくれた同好者はインド語かインドネシア語の西川氏と中国語の加藤氏と共に二回生であった。この時かこのあとしばらくしてインド語一回生の西前氏が加わるのであるが、当時の私は浪人による一年間のブランクと入学初年度の周囲に対する不慣れから山岳部（又は山岳同好会）の設立というこの話にはそれ程乗気ではなかった。又一方にこれ等素人の諸氏と山行を共にできるものかという想い上りないしは気負いのあった事も確かである。この年の夏は高校の後輩二～三名と鹿島から針ノ木に縦走し、久し振りに山の空気を満喫したが、それと同時にやはり俺には山が一番だという強い情熱をかきたてられた。そしてこの止むに止まれぬ気持と前記四氏の変わらぬ熱意にひきずられてこの年の暮に山岳部設立の話がまとまった。こうして何回かの打合せを経て最初の部員募集ポスターが掲示板に張り出されたのは昭和三十二年四月の上八本校舎での入学式の時であった。即ちこの年から高槻校舎が廃止されて上八に統合されたのである。但し記憶があいまいで申し訳ないが高槻校舎時代にも募集ポスターを張ったような気もするが、いずれにしろ上八本校舎に統合された時点でのメンバーは合せて五名である事に変わりはなかった。さて入学式のポスターには「山岳同好会」、「女子の入会歓迎」とか「未経験者歓迎」と入れてあった筈である。つまり私としては入会する人もきっと素人であろうからグレードの低い気軽な山行をなるべく大勢の人々と楽しめばよいとの考えであった。事実相当数の入会者は全て未経験者と言える人々であった。「山岳同好会」としたのもこの面の配慮からで、山岳部イコールぎついシゴキという印象を与えない為であった。こういった私の考え方は会の運営方針、即ち登山対象とか登山方法にも徹底させそれはそれなりに成功し、山岳会（のちになって山岳部と名称変更した）の存続発展をみたのであると自負しているが、翌年の秋頃からこの私の方針では部の運営に自信が持てなくなるという困難な事態が生ずる事となった。即ち一部の上達した部員の満足を得るにはこの方針を変えざるを得ず、一方私自身としてもより困難なわざより程度の高い山行を望む気持が強くなつて少数派につくつか、他の大多数の登山爱好者につくかという二者択一を求められる事態に遭遇する訳であるが、この経緯については部の発展にとって大切な事件であったので別の機会にお知らせしようと思う。

扱て募集により男ばかり二十名近くが集まり正式に山岳同好会がスタートした。何しろこれ等の人々は山に入った事もないのであるから、ある教室に皆を集め、まず装備の説明から始めて最低必要品を準備させた訳であるが、キスリングザックの寸法から指定しなければならぬのであるから、どんな気持から応募された人達かわからぬというものである。会の最初の行事は五月に行なった御在所獄であるがこの時は私を含め殆んどが不参加で、村上氏、西前氏等の四～五名であった。従って二回目の行事に当る昭和三十二年七月の南アルプス駒ヶ岳より北岳縦走が正式の頭初行事とも言える訳で、参加者は十五～六名と多数にのぼった。即ち三回生六名、二回生二名と一回生七～八名である。人々の格好は夫々思い思いでザックを背負ったぶざまな姿をみてこれらの十二日間の縦走に大いに不安を覚えたものである。この時の写真を観て戴ければ現在に続くその後の部活動の記録とは判然一別できるものであつて、駒ヶ岳での全員集合の写真は土建屋さんの集まりと言つてよい。何事であれその初期の幼稚さ、困難さ等今になって分るオカシサを示すものとして非常に懐しい記録である。縦走の初めの三日間は慣れないその背負荷の重量からダウンする者続出で行程の遅れと荷物の配分に気をつかったが、仙丈岳へのあたりから調子がつき写真を見ても山になじんでいる様子がよく出ている。縦走も終りに近づいた北岳で雨が降り出し殆んどの人がバテ出した。この為比較的元気な者を先行させバテた四～五人を縦走路直下の山陰に集めて飯盒の残飯にミソと生の玉葱をのせて出した。降りしきる雨の中で土氣色の顔をして食べる彼等を元気づけたのは忘れられない光景である。夏山が終つて三名ほど抜けたが一人を除きむしろ本来のラグビー部に戻つて立つたと解した方が正しい。秋には唐松から鹿島槍への縦走に奥田、坂田、大藤（ラグビー部員で翌春退部する）並びに私の四名が参加した。二日続きの雨のあと雪と強風の中他の登山者の止めるのもきかず唐松小屋を出發した。五龍にかかる頃より晴れ上り新雪を踏みしめて頂上に立つた。この山行によって奥田、坂田の両氏は自信がついたようで特に奥田氏はこの中の山行に強力な戦力となるまでに成長した。冬休みは私の故郷のスキー場でスキーを楽しんだ。参加者は八～九名であり満足に滑れる人は居なかつたが、私としては春休みの針ノ木登山の為にスキーを覚えて貰いたかったからである。この三月の針ノ木には正月のスキー参加者の全員（だったと思う）を含めて十数名が参加した。激しい降雪の中を篠川沿いに大沢小屋に向かつたが、スキーと背負荷の重量並びに風雪に負けて皆元気を失い初日にしてダウント大沢小屋にも着けなかつた。為に途中の営林小屋に入り翌日は荷物だけを運び三日目にして大沢小屋に入る有様であった。この山行で忘れない出来事に二件ある。ひとつは雪渓上でのスキー訓練中に田村氏がデブリ上の吹き溜りに頭から突込み姿が見えずに二本のスキーだけが空中でもがいていた様であり、もうひとつは頂上直下まで皆をリードしたところで横列に手をつなぎ快晴の頂上に一気に登つた。そこで休んでいる時にウィスキーをやりすぎて皆ふらつきながら少し降りてから酔つた勢いで急斜面を尻にヤッケを敷いて一気に滑り降りた事である。新雪の急斜面を多勢が並んでグリセードならぬシリセードをやり雪崩にも逢わずに雪渓までたどりつけた事は全く神の加護というほかなく、あとになって私は冷汗を拭うと共に深く神に感謝した事を覚えている。ところでこの山行は皆初めての雪山である。ピックルの使い方、アイゼン、ワカン、グリセード等全てが初めての経験であったが幸い頂上に立つ事ができた事もあって（初心者にとっては感激するものだ）この山行を契機に部の体質は一変した。即ち夏の南ア、冬の針ノ木を経て部の基礎は固まつたと言ってよく、新部員の中からも田村、奥田、坂田といった戦力が育ち、又皆が常に登山知識の吸収に努力したので山岳同好会設立一年にして外に向つても何とか格好のとれる状態になった。彼等は山行の経験こそ僅かだが日頃の真剣な努力によって登山知識に於ては私を追い越さんばかりで、以後私の負担は大きく軽減された。翌年、村上、加藤、西川の三氏は四回生になって部の活動に参加する機会は稀になつたが、西前氏、田村氏、奥田氏、坂田氏等が協力して部を前進させた。昭和三十三年四月には更に新入部員の加入があつて山岳部の世帯も大きくなると共に部活動も一段と活発になるのであるが、これについては別の機会に書く事として、茲では誕生からよちよち歩きできる事になったところまでをお伝えしたところで筆を折りたい。いずれにしても私として非常に幸運であった事は山岳部設立時に前記村上氏等三氏が私をひっぱつてくれた事と常に向上心に燃えた西前、田村、奥田、坂田氏等が一致協力して部の基礎固めと発展に尽してくれた事で、これが有つればこそ外大山岳部が今に続いて活躍している事を思うとこれら各氏に対して改めて感謝の意を表するものである。

[D-35年卒]

